石山寺本大唐西域記長寛点の敬語

宇都宮　睦男

1

石山寺本大唐西域記点は、巻末識語に、

長寛元年八月十六日移点了（巻第一）

とあって、長寛元年（一一六三）に加点された点本である。加点者については不明であるが、中田祝夫博士は「その使用したヲコト点が三論宗点であることは、その人々が恐らく真言宗の僧徒であったことを思はせるのである。」（「古点本の国語学的研究　訳文篇」三八頁）と説いていられる。

本点の和訓の特異性については、既に築島裕博士が詳細に論じていられるが、[注1] 敬語の面に焦点をあててみても、他の点本にはあまり見られないような特異性が伺えるようであるので、その特異性とはどのようなものであるか、又、どうしてそのような特異性が生じたのかという点について考えてみようと思う。

2

まず、訓点語の敬語は、一般的にどのようなものであったかについては、大坪併治博士が次のように説いていられる。[注2]

一　訓点語では、奈良時代からあった古い敬語法を用い、平安時代になってできた新しい敬譲語を用いない傾向がある。

二　訓点語では、敬譲語の助動詞の種類が少い。

三　訓点語では、いくつかの敬譲語の助動詞を続けて用いることが少い。

四　訓点語では、尊大表現が多い。

要するに、訓点語の敬語は、和文に比べて比較的単純であるということができる。

それでは、石山寺本大唐西域記長寛点の場合はどのようであるかを次に調べる。まず、その他の点本に見られる敬語の種類とその使用回数を調べて、時代順に列記すると次のようになる。

A　平安時代初期

(1) 聖語蔵御本唐写大乗阿毘達磨雑集論古点[注3]　ナシ

(2) 岩淵本願経四分律古点

タマフ（助動詞）、タテマツル（助動詞）イマス、マウス、タテマツル（動詞）、タマフ（動詞）、ミソコナハス、マシマス、イデマス。（9種）

(3) 小川本願経四分律古点

タマフ（助動詞）48、タテマツル（助動詞）22、イマス17、マ

ウス61、タテマツル1、ノタマフ151、接頭語ミ2、シロシメス4、イデマス3。（9種）

(4)唐招提寺本金光明最勝王経古点

タマフ（助動）25、タテマツル（助動）9、マヲス6。（3種）

(5)西大寺本金光明最勝王経古点

タマフ（助動）、タテマツル（助動）、イマス、マヲス、タテマツル（動詞）、ノタマフ、シロシメス、ツカマツル、ウケタマハル、マウヅ1、タマフル、ミソナハス、キコシメス、マシマス1、イデマス、オモホス、メス。（17種）

(6)山田本妙法蓮華経古点

タマフ（助動）、タテマツル（助動）、イマス、マウス、タテマツル（動詞）、ノタマフ、シロシメス、タマフ（動詞）、タマフル、ミソナハス1、オモホス、マツル、マス、ハベリ。（14種）

(7)東大寺図書館本成実論天長点

タマフ（助動）6、タテマツル（助動）2、イマス1、ノタマフ3。（4種）

(8)大東急記念文庫本大集百論釈論承和点　ナシ

(9)大東急記念文庫本百論天安点　ナシ

(10)東大寺図書館本地蔵十輪経元慶点

タマフ（助動）193、タテマツル（助動）22、イマス1、マウス32、タテマツル1、ノタマフ51、接頭語ミ16、シロシメス9、ツカヘマツル1、マウヅ1、タマフル10、マキル1、ミソコナハス1、キコシメス1。（14種）

(11)東大寺本金剛般若経賛述仁和点

タマフ（助動）、タテマツル（助動）、マウス、タテマツル、タマフ（動詞）、マシマス、マミユ。（7種）

(12)石山寺本蘇悉地羯羅経略疏寛平点

タマフ（助動）。（1種）

(13)知恩院本大唐三蔵玄奘法師表啓古点

タマフ（助動）9、タテマツル（助動）5、マウス2、タテマツル6、接頭語ミ1、ツカヘマツル1、ウケタマハル1、マキヅ1、タマフ（動詞）2、オホス1。（10種）

(14)興聖寺本大唐西域記巻十二古点

タマフ（助動）23。（1種）

B　平安時代中期

(15)石山寺本弁中辺論延長点　ナシ

(16)石山寺本法華経玄賛淳祐古点

タマフ（助動）115、イマス8、ノタマフ17。（3種）

(17)石山寺本蘇悉地羯羅経略疏天暦点

タマフ（助動）、タテマツル（助動）、イマス。（3種）

(18)聖語蔵辨中辺論天暦点　ナシ

C　平安時代後期

(19)石山寺本法華経義疏長保点

タマフ（助動）548、タテマツル（助動）24、イマス18、マウス1、ノタマフ7、接頭語ミ17、シロシメス3、ミソナハス4、オモホス1、ラル1。（10種）

(20)西大寺本護摩密記長元点

タマフ（助動）7、タテマツル（助動）1、タテマツル（動詞）2、マツル1。（4種）

(21)西大寺本不空羂索神呪心經寛徳点
タマフ（助動）20、タテマツル（助動）11、イマス6、接頭語ミ4。（4種）
(22)大東急記念文庫本大日経義釈巻十三承保点
タマフ（助動）22、タテマツル（助動）3、マウス3、タテマツル（動詞）1。（4種）

D　院政時代

(23)天理図書館本妙法蓮華経第四寛治点
タマフ（助動）36、タテマツル（助動）14、イマス16、マウス3、ノタマフ9、接頭語ミ13、シロシメス1、オボス3、タマフル3、ミソナハス2、キコシメス1。（11種）
(24)興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点
タマフ（助動）150、タテマツル（助動）14、イマス1、マウス5、タテマツル（動詞）2、ウケタマハル6、タマフ（動詞）4、オボス1。（8種）
(25)西南院本甘露軍荼利菩薩供養会誦成就義軌康和点
タマフ（助動）18、タテマツル（助動）4、接頭語ミ5。（3種）
(26)神田本白氏文集天永点
タマフ（助動）11、イマス4、マウス5、タテマツル（動詞）9、ノタマフ1、シロシメス1、ウケタマハル1、マウヅ1、タマフ（動詞）2、マキル2、オホス1、マシマス1、イデマス1、マミユ1。（14種）
(27)石山寺本大唐西域記長寛点
タマフ（助動）100、タテマツル（助動）5、イマス2、マウス5、ノタマフ7、接頭語ミ5、シロシメス2、ツカヘマツル2、ウケタマハル4、マウヅ1、オボス3、マキル1、オホス1、ミソコナハス1、マシマス6、イデマス1、マミユ2、ラル1、タブ2、オハシマス1、イマシ（代名詞）2、ミカド（名詞）1、接頭語オホミ（ム）4、接頭語オホ1。（24種）

以上、27種の点本を調べた結果によると、各敬語の頻出度数は、次のようになる。（例えば、タマフ（助動詞）は22種の点本に見られる。）

タマフ（助動詞）22、タテマツル（助動詞）18、イマス14、マウス（マヲス）14、タテマツル（動詞）11、ノタマフ10、接頭語ミ8、シロシメス8、ミソ（コ）ナハス7、タマフ（動詞）6、ウケタマハル5、マキヅ（マウヅ）5、マシマス5、イデマス5、ツカマツル（ツカヘマツル）4、タマフル4、オボス3、マキル3、オホス3、キコシメス3、マミユ3、オモホス3、マツル2、ラル2、タブ1、オハシマス1、イマシ（代名詞）1、ミカド（名詞）1、接頭語オホミ（ム）1、接頭語オホ1、マス1、ハベリ1、メス1。

つまり、頻出度の高い敬語は、タマフ（助動詞）、タテマツル（助動詞）、イマス、マウス、ノタマフ、シロシメス、接頭語ミなどであって、数が限られていて、大坪博士の説かれた通りである。

3

訓点語の性格は、一般に平安初期と中期以降とでは、大きな相違が見られるようであるから、(注4)敬語の場合も、初期と中期以降とに分けて考えることにする。

まず、敬語の多い点本としては、前項の調査から、便宜上六種以

上の敬語を持つ点本を取り出すと、次のようになる。

A　平安時代初期

(2)岩淵本願経四分律古点　(9種)
(3)小川本願経四分律古点　(9種)
(5)西大寺本金光明最勝王経古点　(17種)
(6)山田本妙法蓮華経古点　(14種)
(10)東大寺図書館本地蔵十輪経元慶点　(14種)
(11)東大寺本金剛般若経賛述仁和点　(7種)
(13)知恩院本大唐三蔵玄奘法師表啓古点　(10種)

B　平安時代中期以降

(19)石山寺本法華義疏長保点　(10種)
(23)天理図書館本妙法蓮華経第四寛治点　(11種)
(24)興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点　(8種)
(26)神田本白氏文集天永点　(14種)
(27)石山寺本大唐西域記長寛点　(24種)

平安時代初期においては七種の点本があり、中期以降においては五種の点本がある。つまり、概して言えば、時代が下るに従って、次第に敬語の種類は少くなっていく傾向がある。この傾向は、更に多くの資料を調査することによって、一層明らかにされ得る。この傾向の中で(27)石山寺本大唐西域記長寛点は、院政期の加点であるにもかかわらず、二十四種もの多くの敬語を持っていることは、平安初期にもその類例を見ない程であって、いかに本点が特異な存在であったかを如実に物語っている。

4

次に、それらの敬語の多い点本について、その性格を概観する。

まず、中期以降では、(23)天理図書館本妙法蓮華経第四寛治点は、その奥書に、

点本経云同二年正月之此以元興寺明詮僧都点導本為其本以朱大都移点了（朱筆の抄出）

とあって、元興寺の明詮点を移点したものであることがわかる。明詮は貞観十年（八六八）に寂しているから、この人の加点とすれば、むしろ平安初期の訓点ということになる。次に、(26)神田本白氏文集天永点は、漢籍の訓点で、所謂博士家点である。また、(24)興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点も、内容上漢籍に通ずるものであり、(27)石山寺本大唐西域記長寛点もまた同様である。従って、本調査によれば、中期以降では、仏典の点本は、(19)石山寺本法華義疏長保点だけである。

一方、初期の点本を見ると、前項の敬語の多い七種の点本を含めたすべての点本は仏典であることが、中期以降の場合と異っている。

従って、全期にわたって見れば、石山寺本大唐西域記長寛点は、ヲコト点に東大寺三論宗点を用いた仏家点ではあるが、中期以降の点本と比較すると、仏典よりも漢籍の点本に共通した性格を持っており、一方、初期の点本と比較すると、仏典の点本と共通していることになる。それを次に具体的に述べる。

一　平安初期の仏典、及び神田本白氏文集、慈恩伝古点に見られる敬語で、大唐西域記長寛点にも又見られる敬語。

（「慈恩伝古点」とは興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の略）

〔ウケタマハル〕

①我し今是の経を聞キたてまつること、親リ〔於〕佛前にして

受ケタマハリヌ（西大寺金光明最勝王経）春日博士による。

②忽に微生（を）以て親り梵の響を承リて踊躍（と）アカリ、（知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点38）

③玄奘、濫シク天造ヲ沐（ミ）テ肅ミテ明詔ヲ承ル（慈恩伝古点336—337）

④皆云（は）ク、内に入（り）ナば必（ず）恩を承リナム（神田本白氏文集20）

⑤又、至教を聞タリ皆ラ鑿垢を出（で）俱に聖果を證す（石山寺本大唐西域記661—356）

二　平安初期の仏典及び神田本白氏文集に見られる敬語で、西域記長寛点にもまた見られる敬語。

〔マウヅ〕

①時に四（はしら）の如来は亦鷲峰に詣デたまひて（西大寺本金光明最勝王経古点10—13）春日博士による。

②聟聞の色相を現じて、来デて大師に稽首す（東大寺図書館本地蔵十輪経29の558）

③百辟、閤門に詣ヅ（神田本白氏文集48）

④幼日王、命（じ）て大族を引キ母の宮の中に至デシム（石山寺本大唐西域記581—51）

〔マキル〕

①王の所（に）至（り）て（地蔵十輪経73—272）

②明朝、明光殿に、趨り入（り）て唯、慶雲、寿星、見ユトノミ奏ス（神田本白氏文集31）cf〔ウケタマハル〕の④

③如来、在昔、此（に）於（て）澡浴。（石山寺本大唐西域記605—437）

〔オホス〕

①光命隆に厚（け）れば（知恩院本大唐三蔵玄奘法師表啓古点36—88）

②去シ年中使、口勅を宣セ（たまふ）（神田本白氏文集72）

③敢マリて大造を承ヌ（西域記長寛点581—62）

〔マシマス〕

①我以請二佛及僧一在レ園供養上。（岩淵本願経四分律12/25）大坪博士による。

②尒時世尊黙然して〔而〕止ス。（西大寺本最勝王経11—19）春日博士による。

③七年於二嬰兒一。八年作二童子一。（東大寺金剛般若経賛述26/1）大坪博士による。

④吾が君、位に在ること、已に五載。（神田本白氏文集53）

⑤王は高楼に在シ（西域記長寛点561—254）

〔イデマス〕

①佛不レ欲下ニ新衣上一行上。（岩淵本願経四分律28/4）大坪博士による。

②時に世尊、阿難と〔与〕俱に行デマス。（小川本願経四分律25—60）

③父母見已（り）て憂悲を抱（き）て、俱に山林の捨身の處に往デ

マシキ。（西大寺本最勝王経199—19）春日博士による。

④一人の出スニ〔兮〕、容易カラ不。（神田本白氏文集54）

⑤吠舎釐の王の阿難来スト聞（き）、悲喜心に盈（つ）（西域記長寛点658—324）

〔マミユ〕

①如ク視マミユルトキハ尊位ニ不ヨリ令ニ餘人敷二座具一也。（東大寺本金剛般若経讃述6/1）大坪博士による。

②未（だ）君王に面を見マミユルこと得（る）こと容サレ未（る）に、（神田本白氏文集20）

③是は世親菩薩の都史多天従（り）、下て無著菩薩に見マミエシ處（なり）。（西域記長寛点624—268）

三　平安初期の仏典及び慈恩伝古点に見られる敬語で、西域記長寛点にもまた見られる敬語。

〔オボス〕

①多宝如来を見上ラムト欲オボシテ（天理図書館蔵妙法蓮華経巻第四46上）

②久（シク）疲勞エイシテ眠（ラム）ト欲オボスラム（慈恩伝古点29—29 5）

③世尊既に見て哀愍（して）言（をもて）喩サトス可キ（に）非ズトオボシ（西域記長寛点656—284）

四　平安初期の仏典に見られる敬語で、本点にもまた見られる敬語。

〔ツカヘマツル・ツカウマツル・ツカマツル〕

①三業倦（め）ルこと無（く）して慈尊に奉ツカマツリ、速ク生死を出（で）て真際に歸（せ）む。（西大寺本最勝王経204の5）春日博士による。

②皆来（り）たまひ奉タテマツ（り）ツカ（へまつ）ル。（地蔵十輪経22—448）

③玄奘、往サキ（に）振錫シに因（り）て聊（か）崛山に謁ツカヘマツリき（知恩院本大唐三蔵玄奘法師表啓37—101）

④諸—鬼教を承（り）、奉ツカマツリテ〔以〕周旋（す）。（西域記長寛点651—197）

⑤敢カタジケナク稚女を奉（り）以て灑キ掃（く）コトを供ツカマツラセム。（同609—41）

〔ミソコナハス・ミソナハス〕

①或ハ肩ニ搭チ、或ハ帯ヲタルヲ著ニ腰中ニ、見ミソコナハシ（り）て、（岩淵本願経四分律1/2 2）大坪博士による。

②然レども〔而〕如来は彼の有情の所作の事業を見（そ）ナはして、（西大寺本最勝王経18の12）春日博士による。

③我見ミソナハス（中略）志ニ求ル佛道ヲ者（中略）聞ケル中方便ノ所説ノ法ヲ。（山田本法華経9/18—20）大坪博士による。

④衆苦に在（る）を見ミソナ（はすに）随（ひ）て、（十輪経元慶点9—160）

⑤尒時釈迦牟尼仏所分身の諸仏悉に已に来集して各各師子の座に坐（し）下ヘルを見ミソナハシ（天理図書館蔵法華経寛治点45下）

⑥如来、吠舎釐国に在（り）、天眼を（もて）見ミソナハシて悲心を興シタマヒキ（大唐西域記長寛点660—339）

以上に列記した敬語、ウケタマハル、マウヅ、マキル、オボス、マシマス、イデマス、マミユ、オボユ、ツカヘマツル、ミソコナハスなどは、平安初期の点本か、又は中期以降では漢籍にしか見られない敬語であって、中期以降の仏典には、普通あまり見られないものである。しかるに、大唐西域記長寛点は院政期の仏家点であるにもかかわらず、これらの敬語が見られることは、本点か、平安初期の古い訓法を留めているものであることを表わす。

5

次に、石山寺本大唐西域記長寛点に於ては、第二項で調べたその他の点本のいずれにも見られない特異な敬語がある。それは、まず、尊敬をあらわす接頭語である。他の点本では、普通「ミ」が用いられているのに、西域記長寛点には、この他に「オホミ」「オホム」「オホ」などが見られる。その例は、次の如くである。

①王昔、遊(オホミユキ)方ニ命（じ）て（西域記長寛点522—191）

②以て雌雄を定メ、以て民俗(オホムタカラ)を寧(ヤス)メムと欲(す)（同592—215）

③是し我（か）先(さきの)王(ホヅ)（マ、）(オホキミ)（の）本国の人（なり）〔也〕。（同585—109）

これらの接頭語は、宣命や記、紀などには見られるが、点本には普通見られない。

又、代名詞の「イマシ」がある。その例は次の如くである。

①母の曰（く）、「汝(ス)(マシ)出(で)て〔之〕後に如来此に至(イマ)シキ。」（西域記長寛点556—174）

②外道有（り）。曰ク、「吾子の何ゾ其（れ）異(コトナ)ルヤ〔乎〕。(シカルヤ)（同595—266）

これも、奈良時代語で、万葉集などに例がある。又、

①成（く）に神武を懼（れ）大位に推(オ)シ尊(タフト)ブ（同555—153）

のように、「ミカド」という語があるが、これは、和文では奈良時代にも平安時代にも用いられているが、訓点本には例を見ない語である。

要するに、これらの敬語は、和文の世界に用いられる語である。しかるに、これらが本点に見られることは、西域記長寛点の性格が漢文直訳的でなく和文的に言いやわらげられた表現をしていることを表わしている。

以上、第二項から第五項までをまとめて図示すると次のようになる。

一　訓点常用敬語（点本一般に共通して見られる敬語）
タマフ（助動）、タテマツル（助動）、イマス、マウス、タテマツル（動詞）、ノタマフ、ミ（接頭語）、シロシメス

二　準訓点常用敬語（平安初期の佛点及び中期以降の漢籍の点本に見られる敬語）
ウケタマハル、マウヅ、マキル、オホス、マシマス、イデマス、マミユ、オボス、ツカヘマツル、ツカマツル、ツカウマツル、ミソコナハス、ミソナハス、オモホス、マツル、ラル、マス、ハベリ、メス、タマフル、タマフ（動詞）、キコシメス

三　非訓点常用敬語（大唐西域記長寛点だけに見られる敬語）
タブ、オハシマス、イマシ、ミカド、オホミ、オホム、オホ（接頭語）

6

終りに、大唐西域記長寛点の敬語の特異性は、如何なる原因に拠るものかに触れる。

それは、本点が、一見仏家点法によりながら、実は、古い訓法を残存することの多い漢籍の訓法に通ずる訓読を主体としていることに拠ると思われる。それは、次のような事実から理解できる。

一　神田本白氏文集と一致する訓法が多い。例えば、ムトホツス（欲）、曰ク――トイフなどの訓法を共有すること。

二　博士家点の日本書記古訓と一致する訓法が多い。(注5)

三　「石山寺本大唐西域記長寛点の敬語」（41年度広島大学国語国文学会春季研究集会における口述発表）で調査した本点の訓法の性格からもいえる。

などである。

（昭和四十一年十月十三日稿）

注1　築島裕博士「石山寺本大唐西域記の和訓の特性」（「平安時代の漢文訓読語につきての研究」所収）

注2　大坪併治博士「訓点語の敬語」（「訓点語の研究」所収）

注3　点本(1)～(27)までの出所は次の如くである。

(1)鈴木一男氏（訓点語と訓点資料二。以下「訓誌」と略称）(2)大坪博士「訓点語の研究」（以下「訓研」と略称）(3)大坪博士「訓誌」九(4)稲垣瑞穂氏「訓誌」一(5)春日博士「西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究」(6)大坪博士「訓研」(7)稲垣氏「訓誌」二・三(8)大坪博士「訓研」(9)同上(10)中田博士「古点本の国語学的研究」（以下「点研」と略称）(11)大坪博士「訓研」(12)同上(13)築島博士「訓誌」四(14)曾田文雄氏「訓誌」十四・十五(15)大坪博士「訓研」(16)中田博士「点研」(17)大坪博士「訓研」(18)築島博士「訓誌」一(19)中田博士「点研」(20)小林芳規先生「訓誌」一(21)同「国語学」三十三(22)松本健二氏「訓誌」十七・二十三・二十八(23)広浜文雄氏「訓誌」一(24)築島博士「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究訳文篇」(25)曾田氏「訓誌」十一・二十九・二十二(26)古典保存会本(27)中田博士「点研」

注4　小林芳規先生「漢文訓読史研究の一試論」（国語学五十五輯）

注5　築島博士「日本書記古訓の特性」（「平安時代の漢文訓読語につきての研究」所収）

（付記）本稿は、昭和四十一年八月七日八日・第七回広島大学教育学部国語教育学会（広島大学教育学部視聴覚教室）に於て発表したものをもとにして成ったものである。